
【そこはかとなく S S】

神無月によ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【そこはかとなくSS】

【Nコード】

N6107Z

【作者名】

神無月によ

【あらすじ】

つれづれなるままに、一口サイズのSSを。

ただし、この物語はフィクションです。

実在の人物、もしくは団体、あるいは事件、その他、一切関係ありません。

『初恋以上、恋愛未満』（前書き）

この物語はフィクションです。実在の人物、もしくは団体、あるいは事件、その他、一切関係ありません。

『初恋以上、恋愛未満』

地元の田舎具合に嫌気がさした。

そんなシンプルかつ稚拙な理由で、僕は今年の春に上京する決意を固めた。

都会に住めばきっと何かが変わる。自らもそこに溶け込むだけで、手軽に心機一転の環境が整えられ、身も心の垢抜けられる。

と、思春期のせいにするこさえ躊躇われる愚昧な憧れと根拠を盲信した結果、僕は滑り止めで受けた都内の私立高校に入学することになった。

結局、両親の反対を押し切ってまで田舎を飛び出し、手に入れた目新しい変化など鬱陶しい『人ゴミ』と、毎日の選択センスが問われる『学校への私服登校』くらいなものだった。

感触はまさに肩透かし。受け身な体勢が悪かったのだろうか。都会に住んだところで僕自身の何かが進化することはなく、惰性的な二ヶ月はあっさりと貪り取られ、早くも大暑にさしかかっていた。

そして、情けないことに二ヶ月が経過してもなお、僕には校内――それどころか県内で友人と呼べる存在が一人もできていない。クラスで孤立している理由は分かっている。

自身の田舎くさい容姿に始まり、頭があまり良くないこと、人付き合いが得意ではないこと。それから、やや中二病をこじらせた二次元関係のオタクであること。

それらが原因だと分析し、理解している上で改善の努力を試みない姿勢こそが、孤独に好まれた真相なのだろう。

入学したばかりの四月当初こそ話かけてくれる子もいたが、僕の正体がバレた今では皆無だ。決して陰惨ないじめを受けているわけではないのだが、気が合う仲間もいないので寂しいものは寂しい。

そろそろ三次元に見切りをつけるべきかもしれない。

寂寥を誤魔化すため、そんな子供じみた諦観にひたる自分に心地良ささえ感じているあたり、けっこう僕は末期なんだと把握していた。

けれど、一週間ほど前。

こんなどうしようもない僕の心に、かなり遅い春の風が吹き込んできた。

紙の上に描かれているキャラクターや、パソコン画面の向こう側に存在する異世界に憑かれていた僕の胸に、まるで津波のように、あるいは雷鳴のように、それこそ嵐のように押し寄せた、破壊的な幻想の衝撃。

もはや言い逃れなど許されなくらいストレートな感情。

僕はその正体を知っている。

経験している。

左心房を一瞬でわし掴みにしたものの。

間違はなく――一目惚れ。

それを自覚した刹那、僕は体全体に熱を感じた。高鳴る鼓動に導かれるまま、本校ではあまり需要のない図書室に駆け込んで、適当な辞書を手に取って引いた記憶がある。

一目惚れ「名」スル

？ようは、どこの馬の骨ともしれない初見の相手に第一印象、つまり最短一秒を切る速度で、電撃的な恋に落ちて（堕ちて）しまうこと。相手の外見に一瞬で欲情した事実を否定する権利、言い逃れ、情状酌量の余地がないということ。あなたの恋愛価値観は、内面重視ではないということ。所詮、あなたはその程度の人間だということ（笑）。

？誰でも知っているこんな言葉をわざわざ辞書で検索しているあなたは、どうせ一目惚れ仕立ての浮かれたリア充だ。豆腐の角に頭を打てばいいのに。

僕は、明らかに著者の私怨を文章に反映している辞書と出くわした。

作家志望として一期一会を大切にしている僕ではあるが、その斬新な辞書だけはそつと棚に戻した。こんなものを学校の図書館にチョイスするから、生徒の足が遠のく一方なのではないかと、割と冷静な分析をした。

しかし、直後には心底どうでも良くなっていた。

なにしろ一目惚れなど初めての経験だったからだ。ゆるやかに離陸するような恋こそしたことがあれど、目にした即座に恋に落ちた記憶はない。

僕は最初この気持ちに戸惑いを覚え、素直になれず、感情の置き場所さえ見つからず酷く困惑した。

僕なんかがおこがましい、とさえ思った。
でも。

それでも。

どれだけ卑屈な僕でも、気がつけば彼女の姿を目で追っている自分を否認することはできなかった。

一目惚れのきっかけ。

別に大したことではなかった。

僕は部員一名の文芸部に所属していて、放課後はいつも創作活動に励んでいる。恥ずかしながら、ライトノベル作家になることを密かに夢見ていたりする。恥じらい、語らう相手などいなかったけれど。

それで、ライトノベルの新人賞に合わせて、応募用の新作を書き下ろすことにしたのが、一週間前。

小ネタやプロットは随分と溜め込んでいたのだが、どうも納得がいかず、何か他のインスピレーションが降臨してはこないかと珍しく部室を出て、校内を散策していた。

人気のない放課後の廊下を宛てもなく、しかし観察眼は凝らしつつ、ぶらぶらと徘徊し、そこで夕日を反射する窓から何気なく目にしたグラウンドの光景。

僕が目を奪われたのは、夕焼けに溶ける景色が美しかったからではない。

そこに――彼女がいたからだ。

彼女は陸上部のエースだった。

グラウンドを一直線に駆け抜けるその姿は、僕の語彙程度では形容しがたいほどに美しかった。

赤く燃える黄昏時。

あの夕日を浴びてひたすらに走る彼女は、まさに芸術性の高い絵として、今でも僕の脳裏に眩しいくらい焼きついている。絵にしたところだが、残念ながら僕に絵心はない。

あれから一週間、僕はますます彼女の魅力に呑みこまれていった。やがて感情は一目惚れをした瞬間以上に燃え上がっていた。

……今さら否定はしない。

僕はどうしようもないオタクだけど、それでも彼女への恋心を否認するほど弱虫ではないつもりだ。

しかし、その感情に従って彼女に告白するかどうかは別問題である。

仮に告白したとしても、勇気が結実する可能性は皆無と断定して良い。

彼女と僕はクラスが違うし、僕の脳みそが恋の熱に浮かされている今でもなお正常ならば、話した記憶さえないのだから。全くの、赤の他人。

それに、彼女はお嬢様だ。

某大企業の令嬢。

常に注目を浴びる存在は、世間体を考慮しなければならないのだろう。世間の目がある以上、前提として彼女は僕みたいな人間と恋

仲になるわけがない。

どれだけ僕が、現在の僕とは一八〇度も違う魅力に溢れた人間であらうと、だ。

少し噂で耳にしたことがあるけれど、やはり彼女はモテるらしい。ひっそりとファンクラブまで設立されているという。告白されることも、しばしば。

だが、彼女はその全てを断っているというのだ。

ハードルは高い。

だから僕なんてなおさらダメなんだろう。

でも、僕はこのままで良いと思っている。

もちろん、それは諦めなのだけれど、それでも僕は彼女を遠くから見守り、自分の内に恋心がまだ存在していることを確認するだけで十二分に幸せなのも、また事実なのだ。

これまで、ずっとそうしてきた。画面の向こう側に映る異世界と同じだ。紙の上の美麗なキャラクターたちと同じだ。二次元と同一視すればいい。

だって。

僕がこの恋を成就するには、色々と障害がありすぎる。

そうして今日も部活を終えた僕は校門の前で一度立ち止まり、我が校の表札を一瞥して、軽く溜息をつく。

——神無月女子高等学校。

ある意味で、僕の『初恋』は最初から終わっていたのだろう。だから恋愛にも発展しない。

昔のように男の子に恋ができれば、まだ努力の甲斐があったかもしれないのに。

過去の記憶に思いを馳せながら、再度溜息をついて、あとは気持ちを切り替える。

さあ、はやく帰って録画したアニメでも見よう。

僕ッ娘バンザイ。

『アイ憎劇』

カーテンが閉じられて薄暗い教室を、幼くも透き通った声が支配する。

「罪悪がないと言ったら嘘になります」

台本を片手に独白を紡いだ一二歳の少女は、悲しげにまなじりを下げた。

その演技といえは真に迫るものがあり、出番待ちのクラスメイトは全員、彼女の一举一動に目を奪われている。

小学生が催す学芸会の劇としては最長学年とも言えども、少女の芝居は一人だけ明らかに次元が違った。

静まり返った教室の中、言葉通りの意味でも比喩の意味でもスポットライトを独り占めにしている少女。

その可憐な声で語られる残酷な言葉は、切れ味の良いナイフのように空気を震わせ、聴衆の心に切り込む。

「わたしは、彼を愛してしました」

そして、少女の白い頬に一筋の涙がこぼれる。

男女問わず、その場にいた誰もが彼女の美しさに溜息を呑んだ。

彼女は頬に伝う雫を拭うこともせず、生きた台詞を続ける。

「そこに欺瞞はありません。わたしは心の底から、心の底から彼を愛していました」

でも、と流れを区切って、少女は膝から床にしなだれる。

まるで重力と絶望が彼女の心をへし折ったかのように。

「でも、だからこそ、わたしは――彼を殺したのです」

ごくろ、と誰かが唾を飲み込む音。

少女は床に座り込んだ姿勢のまま、自らの両手を見下ろしてから、自身の肩をきつく抱きしめた。

同時、

「この手で、この口で、この歯で、この刃で、彼を——殺しました」
儚げな少女は項垂れるように顔を伏せ、長めの前髪が彼女の顔に影を落として表情を隠す。

猟奇的な台詞、その迫真の演技に魅了されない者などいるのだろうか。

「動機なんて一つしかありません。彼を愛していたから。わたしは心の底から愛していたから、彼を食い殺したのです」

そこで、少女は自身の腹部を愛でるように右の手のひらでなぞる。まるで——まるで、愛したがゆえに食い殺した彼を、そこに感じているかのように。

恍惚とした様相で。

何度も何度も撫でる。

そして、一言。

「愛すべき、この子供たちのために」

その台詞が終わると共にパツ、と教室が明るくなった。
生徒の一人がカーテンを開いたのだ。

「どうでしたか、先生」

「あ、あのね、凜ちゃん」

このクラスを受け持つ若い女性教師は、眉間に人差し指を押し込みつつ、叱れば良いのか悲しめば良いのか褒めれば良いのか分からないという風な複雑な表情で、脚本を書き上げた少女——凜に目線を合わせる。

「えーっとね、玲ちゃんの演技力はすごかったけど、脚本は小学生の舞台劇としてはどうなの？ ある意味、昼ドラより恐いことになってるからね？」

教師からやんわりとダメだしを食らった凜は、切なそうに眉をハの字にして、

「没ですか？ 『愛を誓い合ったはずのカマキリ夫婦。そして、子

供たちは今。六年二組がカマキリの気持ちを考え、擬人化を演じる時、愛と憎しみの物語は始まる』は、没ですか？」

「どうしてこれでオーケーが出ると思ったのか、逆に訊きたかった。それとも先生は知らないんですか？」

「何を？」

「カマキリはアレをしてる時に、メスはオスを食い殺して子供の栄養にしちゃうことがあるんですよ」

「変に言葉をぼかしてアレとか言わなくていいのよ？ 交尾、でいいのよ」

教師の微笑みが若干ひきつっている。

「でも、やっぱりシュール過ぎるの。テーマもちよっと可愛くないでしょ？ 愛憎とか、ね？ 分かるでしょ？ ち、ちなみにだけど、憎しみはどんな感じで描写されるの？」

すると質問されたことが嬉しかったのか凜は大きく頷き、満面の笑みで答えた。

「成長した子供たちが、お母さんに『他の家族にお父さんはいるのに、どうして僕たちにお父さんはいないの？』訊ねて初めて、『お父さんを食べたのはお母さんなんだよ』と事実を打ち明けられます。その時、子供たちは、女手一つで育ててくれたお母さんに対して、果たして憎しみを抱くのか同情を抱くのか、そこは皆で考察しようと思ひまして」

小学生相応の愛らしさがあるのは、楽しそうに話す仕種だけだった。

「シビアでシリアスすぎます！ 低学年の子が泣いてしまいます！

もうー、却下あ！」

脚本は白紙に戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6107z/>

【そこはかとなくSS】

2011年12月21日15時54分発行